

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

J.F.ライヒャルトのリート研究：その2 —歌曲集序文から見るリート創作姿勢—

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村田, 千尋, Murata, Chihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1391

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



J.F.ライヒャルトのリート研究：その2

—歌曲集序文から見るリート創作姿勢—

村 田 千 尋

J.F. ライヒャルトのリート研究：その2 — 歌曲集序文から見るリート創作姿勢 —

村田 千尋

はじめに

フリードリヒ大王 Friedrich II von Hohenzollern (1712-86) を始め、3代のプロイセン王に宮廷楽長として仕えたヨハン・フリードリヒ・ライヒャルト Johann Friedrich Reichardt (1752-1814) は、18世紀末から19世紀初頭のドイツ文化全般に大きな影響を与えた重要な人物である(滝藤2017)。同時に彼は、19世紀のドイツにおいて重要なジャンルとなるリート(ドイツ語独唱歌曲)の草創期を主導し、シューベルト Franz Schubert (1797-1828) 以降の「芸術リート」への道を拓いたということでも注目すべきと考えられ、筆者はこれまでに何回か、彼のリート創作について考察を加えてきた(村田1982、村田1983、村田1984、村田1985、村田2016、村田2018、村田2019)。

前稿(村田2016)で明らかにしたように、ライヒャルトは第1次ベルリン・リート楽派のリート理念を受け継ぎ、啓蒙主義的、教育的な誰にでも歌える「民謡調リート」を作ると同時に、詩の読みを大切に「芸術リート」を生み出そうとしたと考えられる。

ところが、これまでの論考において、彼のリートは19世紀に繋がるものとしてよりも、18世紀の流れに続くものとして扱われていることが多かった。たとえばヴァルター・ヴィオーラ Walter Wiora (1906-97) は『ドイツ・リートの歴史と美学』において、「技巧性のない芸術リート das kunstlose Kunstlied」という項目を設け、もっぱらこの枠内で扱っている(Wiora 1971: 110)¹。あるいはハインリヒ・シュヴァーブ Heinrich W. Schwab (1938-) も、彼の主著である『歌いやすさ、民衆性と芸術リート』(Schwab 1965) においては19世紀を準備する存在という位置付けでありながら、ヘルマン・ダヌーザー Hermann Danuser (1946-) の編集になる『音楽的抒情詩』に掲載された「18世紀」の章(Schwab 2004) においては18世紀という枠組みの中で論じている。

しかし、すでに指摘したように彼の《魔王 Erbkönig》(1794) には「朗誦性」、「通作への志向」、「伴奏の独立」という3つの点について19世紀を準備する要素を備えているし(村田1982、村田2018)、彼が言葉の読みを重視していたということは、再三引用されてきた彼の《オー

*1 石井は邦訳においてこの言葉を「芸術性のない芸術リート」と訳しているが、誤訳と考えるべきである。ヴィオーラの文脈からは、「芸術性」の有無ではなく、「自然な民衆性」に対比される「人工的なわざとらしさ=技巧性」を論じていることがわかる。

デとリート Oden und Lieder》第Ⅱ巻 (1780) の序文を見れば明らかである^{*2}。

従来から指摘されてきたように、18世紀の流れの中で彼のリート創作を理解することも必要であろうが、これに加えて19世紀リートを準備したという視点から彼のリート思想を捉えることも行わなければならないのではないだろうか。

そこで本稿では、彼が出版した歌曲集 (歌曲叢集を含む) に掲載された序文を読み込み、併せて彼の著作の中からリート創作に関わる記述を抜き出すことによって、彼のリート創作姿勢を探り、ライヒャルトを1800年前後のリート思想の中に位置付けることを課題とする。

第1章 ライヒャルトが残した曲集序文

1-1. 序文の掲載

前稿でも示したように、ライヒャルトは生涯におよそ70集の歌曲集を出版しており (ここには、ライヒャルト自身のリートだけを集めた「歌曲集」以外に、ライヒャルトが編集した雑誌や、歌曲叢集も含む)、そこにはしばしば序文が掲載されている (村田2016)。そこで、歌曲集に限定せず、器楽曲の楽譜も含めて彼が出版した楽譜に掲載されている序文を集めると、23種が数えられることが分かった。 (「ライヒャルト：出版楽譜序文一覧表」、および「ライヒャルト：序文分布表」を参照願いたい)。

ライヒャルト：序文分布表

年代	歌 曲 集	歌曲叢集	含リート	その他声楽	器楽曲	計
-1775	1 GsG		1 VM			2
1776-90	5 OLI II 82, LK II, DG		2 CI, GR	FM, WC	Son	10
1791-97	1 GKT	2 LFI II	3 C II III IV	EE		7
1798-1807	2 WL, LJI					2
1808-14	1 GLI	1 LFB _e				2
計	10	3	6	3	1	23

曲集の略号は「出版楽譜序文一覧」に準ずる

表中、「歌曲集」としたのはライヒャルト自身のリートだけを集めた楽譜であり、「歌曲叢集」とはライヒャルトが編集し、彼自身を始め、多くの作曲家が作ったリートを収めた歌曲集、「含リ-

^{*2} この序文については第3章において検討する。再三指摘してきたことではあるが、マックス・フリートレンダー Max Friedlaender (1852-1934) が1779年の第Ⅰ巻序文と80年の第Ⅱ巻序文を取り違えて掲載 (Friedlaender 1902: 190, 194) して以来、この誤りはシュヴァーブ (Schwab 1965: 48)、ヴァルター・デュル Waltherr Dürr (1932-2018) (Dürr 1994: 30) 等に踏襲されてしまっているので注意が必要である。なお、デュルの拙訳においては、著者に確認した上で修正を施した (デュル2009: 28)。

ト」とはリート以外に器楽曲や多声声楽曲を含む曲集と彼のリートが付録として掲載されている詩集を指す。詳しくは前稿(村田2016)を参照願いたい。

これを見ると、彼がプロイセン宮廷楽長として活躍していた1776年から90年(前稿では「宮廷楽長時代」とした。村田2016: 8)、続く1791年から97年(混乱期。同)に多く、その前後には序文の掲載が少ないことが分かる。

ほぼ半数の10点は純粋な歌曲集に掲載され、リートを含む曲集(表中では「歌曲叢集」と「含リート」で表示)を合わせると、全序文の9割に及ぶ。それに対して器楽曲は宮廷楽長就任直後の1776年に出版した鍵盤ソナタ集に限られる。

この時代、出版した曲集に序文を添えることは必ずしも一般的なことではなかったと思われる³、およそ70の出版物に対して20あまりの序文というのは高比率と言えるであろうし、リートに集中しているということも注目に値する。

1-2. 序文の内容

次に、序文の内容を大まかに「献辞」、「曲目紹介」、「リート思想」の3つに分けてみよう。この場合、「献辞」には特定の人物への献呈文、読者一般への献呈の辞、作者の自己紹介などを含む。また、「曲目紹介」は収録曲の内容についてさほど踏み込まず、曲目の列挙に近い場合を指す。

ライヒャルト：序文内容分類表

年代	献辞	曲目紹介	リート思想	計
-1775	VM	VM	VM, GsG	2
1776-90	Son, OLI, GR, WC, FM	CI	OLI, OLII, OL82, LK II, DG, CI	10
1791-97	C II, EE, GKT	C III IV	LFI, LF II	7
1798-1807			WL, LJI	2
1808-14	GLI		LFB _e	2
計	10	4	13	23

曲集の略号は「出版楽譜序文一覧」に準ずる

*3 増田は修士論文『G.P.テレマンの音楽思想』(増田2020)において、ドイツで活躍した1600~1700年生まれ of 作曲家約40名を対象に出版楽譜と序文の存在について調べ、テレマン以外の作曲家は序文を掲載することが少ないと報告している。また、そこに掲載されている序文の内容も、ほとんどが以下に示す「献辞」に分類されるという(増田2020: 14-24)。

増田の調査は18世紀前半の出版楽譜を対象としており、本稿が対象とする18世紀後半とは事情が異なることも予想されるが、比較することはできるであろう。なお、今回の調査では、ライヒャルトの声楽出版楽譜についてはほぼ全てを対象としているが、器楽曲については序文掲載が確認された曲だけを対象としているため、器楽曲も含めた総出版数については調べていない。従って、出版数に対する序文掲載割合は20/70よりは小さくなる。

さらに、「リート思想」とひとまとめにしたものについて細かく見ると、「歌の効用」（一般論として歌が教育的にどのような価値を持っているかなど）、「歌い方の注意」（具体的に歌う際の注意事項や当該曲集の使い方などであり、曲目紹介よりは踏み込んでいるもの）、「作曲姿勢」（再び一般論として、ライヒャルト自身の作曲方法や歌詞と音楽の関係についての考え方など）の3種に分けることができる。

ライヒャルト：リート思想分類表

年代	歌の効用	歌い方の注意	作曲姿勢
-1775	VM, GsG		GsG
1776-90	OLI, LK II, CI	OLI, OL II, LK II, OL82	OL II, OLS2, DG
1791-97	LFI, LF II	LFI, LF II	
1798-1807	WL, LJI	WL, LJI	
1808-14	LFBe	LFBe	

曲集の略号は「出版楽譜序文一覧」に準ずる

ここで、曲集序文に記されたライヒャルトのリート思想と各曲集の出版時期についてその関係を見ると、次のことが分かる。「歌の効用」は具体的な内容に違いはあるとしても、最初期から晩年まで一貫して触れ続けた内容である。「歌い方の注意」は最初期にこそ見られないものの、やはり長い時代に亘って言及している重要事項である。これに対して「作曲姿勢」は最初期の修行時代（～1775年）から、宮廷楽長時代（1776～90年）に言及されている内容であるが、この時期はライヒャルトがリート創作に最も力を入れていた時代であると共に（村田2016：8-9）、より大きな視点から見ると、リート創作そのものが大きく進展した時代であると言える^{*4}。まさにその時期に、曲集序文においても「作曲姿勢」に言及しているということは興味深い。

以下、「歌の効用」、「歌い方の注意」、「作曲姿勢」に注目して各序文を読み解き、加えて、ライヒャルトの他の著作も参照しながら、彼の「リート思想」に迫りたいと思う。

第2章 歌曲の目的と歌の教育的効用

2-1. リートの最終目的

ライヒャルトが記した序文の内、「歌の効用」に触れているものを集めると、そのほとんどは

*4 筆者は1790年を中心とした約30年間に「芸術リート」が成立したと考えている（村田1985：58）。この考察を行った段階では、ライヒャルトの曲集序文全てに目を通してはいたわけではないが、今回、彼の全序文を検討した結果と、図らずも一致したことになる。

前稿(村田2016:16-17)において「民謡調リート(啓蒙的歌曲集)」に分類した曲集であり、逆に、「啓蒙的歌曲集」の多くは「歌の効用」に触れているということが分かる。つまり、ライヒャルトは「啓蒙的歌曲集」の多くに序文を書き、その中で「歌の効用」について述べているということになる。

さて、彼が歌曲の最終目的としているのは、「喜び」であると言える。まず、最初期の《様々な楽譜集 Vermischte Musicalien》(1773)において、

「基本的に心地よさと気持ちよさをできる限り結びつけるように、心がけた。

In jenen Stücken habe ich mich bemüht, das Angenehme und Gefällige mit dem Gründlichen so viel, als mir möglich gewesen, zu verbinden(VM, S. II)^{*5}、

「もっぱら人の楽しみを最終目的とすべきである

hauptsächlich das Vergenügen der Menschen zum Endzwecke haben soll, (VM, S. II)」

と言う。約10年後の《子どものための歌曲集 Lieder für Kinder》第Ⅱ巻(1781)においても、

「そして我々は皆、共通の目的、『喜び』を持つに至ったのだ。

wir hatten alle nur einen gemeinschaftlichen Zweck: die Fröhlichkeit. (LK II, S.3)」、

「歌は元気づけ、他愛もない喜び、満足、心情の平安のための有効な手段である。

Auch zur Aufmunterung, zu unschuldiger Freude, zur Zufriedenheit, zur Ruhe des Gemüths, ist der Gesang ein kräftiges Mittel. (LK II, S.3)」

と述べており、1782年にはライヒャルトが発行する雑誌『音楽芸術誌 Musikalisches Kunstmagazin』^{*6}の巻頭論文である「若き芸術家へ An junge Künstler」において、

「いかなる社会においても喜びは最高の目的である。歌以上に素早くこの目的に達する手段はない。

Fröhlichkeit ist aller Gesellschaft höchster Zweck: durch nichts wird dieser Zweck schneller, sicher, allgemeiner erreicht als durch Gesang. (AjK, S3)」

と記載している。さらに、最晩年の《集いの楽しみのための歌曲集 Lieder für gesellige Freude》器楽伴奏版(1810?)では

「良い歌を広め、よい社会に心地よい活気を与えることに寄与しようとした

Man hat … zu Verbreitung des besseren Gesanges und zu angenehmer Bele-

^{*5} 以下、曲集序文の引用出典については、「出版楽譜序文一覧」に示した略号を、その他の著作については以下に示す略号を用いる。

Über die Deutsche comische Oper (1774) =DO

ein freundschaftliches Briefes über die musikalische Poesie (1774) =Brief

An junge Künstler (1782a) =AjK

Ueber Klopstocks komponirte Oden (1782b) =Klop

^{*6} 音楽芸術誌』の主著としての重要性と、当時のドイツ文化圏で広く読まれていたことは、滝藤も指摘している(滝藤2017: 60)。したがって、本稿でも曲集序文を補う文献資料として利用する。

bung guter Gesellschaften beizutragen gesucht (LFBe, S.1)」

という記述が見られ、最初から最後までブレがない。

つまり、ライヒャルトにとって歌曲の目的は「社会を活気づけ、喜びを与える」ことであり、この考え方は生涯変わっていないと考えることができる。

2-2. 《子どものための歌曲集》

「歌の効用」についての集中的な記述が見られるのが、先にも引用した1781年に出版された《子どものための歌曲集》第Ⅱ巻の「若者に An die Jugend」と題された序文である。この序文は、まず1777年にゴットリープ・ヴィルヘルム・ベッカー Gottlieb Wilhelm Becker(1753-1813)が編集する『人類の天体暦、あるいは道徳教育と政治学、立法の叢書 Ephemeriden der Menschheit oder Bibliothek der Sittenlehre, der Politik und der Gesetzgebung』第9部143-151頁に掲載され、1781年に多少手直しをされて《子どものための歌曲集》第Ⅱ巻の序文となり⁷、さらに『音楽芸術誌』第Ⅰ巻第4部(175-176頁)にも、「初期教育における音楽の効用について Ueber die Anwendung der Musik bey der frühen Erziehung」に続けて、やはり「若者に」という題名で掲載されている。つまり、都合3回掲載されたわけであり、ライヒャルトが重視していた考え方だということができる。そこで、この序文を順を追って読んで行くことにしたい。

彼はこの序文をまず、

「私がこの曲集を編纂する意図は、純粹に、良く歌うことを学ぶ努力をするように君たちを励ますことにある。

Meine Absicht … ist euch aufzumuntern, daß ihr euch bemühen möget, rein und gut singen zu lernen. (LK II, S.1)」

という文で始める。続いて、教会における賛美歌の歌唱が必ずしも美しくないことに触れて、乱暴な歌唱は神に捧げるにはふさわしくないとし、

「教会にいる全ての人が純粹に理性的に歌っているならば、こんな事は避けられないのだろうか？

Würde das aber nicht dadurch vermieden werden, wenn alle die, die in der Kirche sind, rein und verständig sängen? (LK II, S.1)」

と問いかける。そして、

「そう、その歌が歌われているラテン語を理解しない人であっても、沢山の声美しく調和するだけでどれほど感動的かということを誰だって確信するのだ。

Ja dieses haben mir sogar Leute versichert, die nicht einmal die lateinischen Worte, die gesungen wurden, verstanden: also blos durch die schöne Ueberein-

*7 序文冒頭に、『人類の天文暦』に掲載された論文を再掲していることが述べられている。

stimmung der vielen Singstimmen so gerührt wurden. (LK II, S.1)」
とする。これによって、冒頭の言葉、「純粹に、良く歌うことを学ぶ」必要性を説くわけである。
次に、教育において詩の利用が有効であるとする。彼は

「人はなぜ良く教育し励まして君たちを徳と隣人愛、苦しみの中での落ち着き、幸福における中庸などへ向かわせようとするのか、人はなぜ君たちに詩を学ばせようとするのか？
より分かり易く、快適に、心に迫るようにするという以外にその理由はない。

warum bringt man euch gute Lehren, Aufmunternungen zur Tugend, zur Liebe des Nächsten, zur Gelassenheit im Leiden, zur Mäßigkeit im Glück u.s.w.
warum bringt man euch die in Verse und Reim? Aus keiner andern Ursache, als um sie euch faßlicher, angenehmer und eindringender zu machen. (LK II, S.2)」

と言う。そして、

「人はなぜ自然な様々な美しさを詩の形で考えさせようとするのか？同様に、より顕著に、
重要に、快適にすることは、真の美しい自然に対する真の愛によって、芸術や道徳における間違った趣味から君たちを守るからだからである。

Warum bringt man euch Betrachtungen über die tausendfache Schönheit der Natur in Verse und Reim? Eben um sie euch merkbarer, wichtiger, bedeutender und angenehmer zu machen, euch durch wahre Liebe zur wahren schönen Natur vor dem falschen Geschmacke in Künsten und Sitten zu schützen. (LK II, S.2)」

と述べた後、詩と歌を結びつける。

彼が言うには、

「詩文を君たちにとってもっと心地よく、心に迫るものにするためには、良く整えられた音こそ、耳に捉えやすくて心地よい、心を感動させる極めて力強い手段である。

Euch diese Verse aber nun noch angenehmer, noch eindringender zu machen, hiezu sind wohlgeordnete Töne, die dem Ohre faßlich und angenehm sind, und die das Herz rühren, ein sehr kräftiges Mittel. (LK II, S.2)」

ということであり、

「良く整えられ、心地よく意味のある音は、詩の形をとったいかなる教えも、いかなる考察も、いかなる励ましも、より重要に、より心に迫るようにするのに役立つのである。

wie viel wohlgeordnete angenehme und bedeutende Töne dazu beytragen können, jene n den Versen enthaltene Lehre, jene Betrachtung, jene Aufmunterung wichtiger und eindringender zu machen. (LK II, S.3)」

となる。

この後、先述の歌曲の目的に関わる発言、「そして我々は皆、共通の目的、『喜び』を持つ

に至ったのだ (LK II, S.3)」、「歌は元気づけ、他愛もない喜び、満足、心情の平安のための有効な手段である (LK II, S.3)」が続く。加えて、

「私はしばしば朗らかな歌を歌うことによって、怠惰で意気消沈した社会全体を元気づけ愉快にしたことがある。

ich habe oft durch Anstimmung eines fröhlichen Liedes eine ganze Gesellschaft, die in Trägheit und Muthlosigkeit verfallen war, aufgeheitert und fröhlich macht. (LK II, S.3)」

と自身の体験を披露する。

その後、ここまでの結論として、

「従って君たちは純粹で適切に歌うことを学ばなければならない。至高の神をたたえ、その無限の恩寵に感謝するためには純粹な喉と敬虔な心でこそ歌うことができる。君たち自身と他の人をそれだけ一層徳と人類愛に向かつて力強く励ますために、君たち自身と他の人のために何千通りもある自然の美しさを感じられるようなものにするために、君たち自身と他の人を喜びと歓喜に力づけるために、君たち自身と他の人をそれだけ一層確実に宥め、満足へと至らせることができるために。

Ihr müßt also rein und richtig singen lernen, um das Lob des Allerhöchsten, um den Dank für seine unendliche Güte mit reiner Kehle und andächtigem Herzen anstimmen zu können; um euch und andre desto kräftiger zur Tugend und Menschenliebe aufzumuntern, und euch und andern die tausendfache Schönheit der Natur fühlbarer zu machen; um euch und andre zur Fröhlichkeit und Freude anzumuntern, um euch und andre desto kräftiger beruhigen und zur Zufriedenheit stärken zu können. (LK II, S.3f.)」

という言葉が続けるのである。

先にも述べたように、この考え方はライヒャルトの基本姿勢であるとすることができる。しかも、その考え方を保ち続けていたことは、1798年に出版した《ドイツの善良な母のための子守歌集 Wiegenlieder für gute deutsche Mütter》の序文に

「善良な優しい母ならば、穏やかなテンポと優しい音だけが繊細な子どもを落ち着かせることができ、深い眠りだけではなく、心地よい音もまたこれからの生活に安らぎを与えてくれることをよく分かっている。安らぎは穏やかな音を逃すことは決してなく、穏やかな音があると母親はまなざしを繊細な子どもに注ぎ、心地よさを感じる。

Eine gute zärtliche Mutter, die wohl fühlt und weiß, daß nur sanfte Bewegungen und milde Töne einem zarten Kinde die Ruhe geben, die nicht nur gedeihlichen Schlaf, sondern auch einen wohlthätigen Ton dem künftigen Leben verleihen können, die wird nie den sanften Ton verfehlen, in welchem sie sich, den Blick aufs zarte Kind geheftet, selbst nur wohl fühlt. (WL, S.IV)」

という言葉が見られることから分かる。

2-3. 教育的価値

先にも述べたように、詩を学ぶ理由として、道徳的内容を「より分かりやすく、快適に、心に迫るようにする (LK II, S.2)」ことを挙げ、自然な様々な美しさを詩の形で考えるのは「より顕著に、重要に、快適にすることは、真の美しい自然に対する真の愛によって、芸術や道徳における間違った趣味から… [中略] …守る (LK II, S.2)」ためとする考え方は、ライヒャルトのみならず、当時のリート作家に共通した考え方であると言える (村田1985、関口2013)。

そして、「良く整えられ、心地よく意味のある音は、詩の形をとったいかなる教えも、いかなる考察も、いかなる励ましも、より重要に、より心に迫るようにするのに役立つ (LK II, S.3)」という考え方も、啓蒙主義的リートの基礎であったと言えるだろう。

ライヒャルトは《子どものための歌曲集》序文において

「敬虔の念を高められる er kann auch die Andacht sehr erhöhen. (LK II, S.1)」

と言うし、《子守歌》序文においても

「多くの良い感情を目覚めさせ、多くのよい教えにより親しませることができる。

manches gute Gefühl erwecken, manche gute Lehre eindringender machen.(WL, S.V)」

と述べている。

さらに、彼は歌曲を言語の教育にも役立つものと考えていたようだ。初期の《オーデとリート集》第Ⅱ巻 (1780) の序文には、

「適切な歌いかたをすることによって、適切な読み方を学ぶことができる

daß der Sänger … so durchs richtige bedeutende Singen richtig und bedeutend lesen lernen könnte. (OL II, S. II)」

と書かれており、歌の基礎として詩を読むことから、読み方を学ぶことができるとする。後にも述べるように、ライヒャルトにとって詩を読むことと歌を歌うことは密接に関連しており、その考え方が教育にも及んだのだと見なすことができよう。

2-4. 教育への配慮

ライヒャルトは声楽曲を数多く作り出す作曲家として、「声」に強い関心を持っていたようだ。1772年にヨハン・カスパール・ラファートル Johann Caspar Lavater (1741-1801) が出版した『観相学 Von der Physiognomik』(Leipzig: Weidmann)において、ラファートルが表情と声の関係について述べていることに興味を持ち、『音楽芸術誌』にも「声の観相学 Stimmphysiognomik」(I, 2, S.94; I, 3, S.152) という紹介記事を書いている。その関連であろうが、子どもの成長と声の関係にも注意を払い、歌を学ぶことにどのような利点があるかということに加えて、身体的、精神的な負担にも言及している。これらはいずれも《若者のための歌曲集 Lieder für die

Jugend》第Ⅱ巻(1799)の序文に見られる。

まず、身体的負担については

「子どもは、特に女の子は肉体的な理由で小さい時から歌を学ぶべきではない。さもないと、年頃になってから余りに早くから酷使して声を失ったり、あるいは肺が何時までも弱いままであったりするからである。

Kinde, besonders weiblichen Geschlechts, sollen auch schon aus physikalischen Gründen nicht früh singen lernen, damit sie nicht in der Epoche der Mannbarkeit die zu früh angestrengte Stimme verlieren, oder wohl gar ihre Brust auf immer schwächen. (LJ I, S. I)」

果たしてこれが、生理学的に適切な記述かどうか^{*8}、疑わしい点もあるように思うが、彼の配慮として記憶しておく必要はある。

一方、精神的な負担については次のように述べている。

「私は成長した若者にこの曲集を喜んで貰いたい。なぜなら、彼等はまだ情熱的な歌を歌うべきでないで、災いをもたらす火をあおり立てる手助けをするべきでなく、その火は若者の感受性の強い心の中で、無邪気な若者の純粋な幸福のために容易に燃え上がってしまう。様々な状況に応じて働いていかなければならないその後の人生に、全てが協和する人生の楽しみへの安全の中で感じ取れる内面的な、そして外面的な安全を得るよりも前にしばしば焼き尽くされたコークスだけを残すことになる。

Der erwachsenen Jugend wollt' ich diese Sammlung gerne angenehm machen: denn sie soll noch nicht leidenschaftliche Gesänge singen, und so ein unheilbringendes Feuer anfachen helfen, das in jungen empfänglichen Herzen für das reine Glück der unbefangenen Jugend nur zu leicht auflodert, und dem folgenden Leben, das sich durch so mannichfache Lage durchzuarbeiten hat, eh' es zu der innern und äussern Sicherheit gelangt, in welcher zum vollen harmonischen Lebensgenuss alles anklingen mag, oft nur ausgebrannte Schlacken zurückläßt. (LJ I, S. I)」

さらに、ライヒャルトが『ドイツのコミック・オペラについて Über die Deutsche comische Oper』の付録として出版した『音楽的な詩についての親密な手紙 Ein freundschaftlicher Brief über die musikalische Poesie』の前半部分では、ドイツ語の発音についての詳細な分析が行われている。

2-5. 民謡への関心

歌曲に啓蒙的な意義を与える場合、その歌曲が誰にでも歌える歌いやすいものであること

*8 ライヒャルトは『美しき女性のための歌曲集』においても、女性を身体的に弱い存在であるとしている(GsG, S.Ⅷ)。

が必須の条件となる。ライヒャルトは

「リートの旋律は耳と喉に適していなければならず、伴奏なしでも自立し、音の単純な繋がりでなければならない。

Liedermelodien in die jeder, der nur Ohren und Kehle hat gleich einstimmen soll, müssen für sich ohn' alle Begleitung bestehen können, müssen in der einfachsten Folge der Töne (AjK, S.3)」

と述べ、歌いやすさを求めている。

この時代、「歌いやすさ」に関連して「民謡調」という言葉が用いられていた(村田1985、関口2013)。ライヒャルトも「民謡」に関心を寄せていたことは明らかで、『音楽芸術誌』第I巻に「民謡について Volkslieder」2,99-100; 3,154-155⁹という論考を掲載しているのみならず、『音楽芸術誌』の巻頭論文である「若い芸術家に」においても民謡を論じ、さらにヨハン・ゴットフリート・ヘルダーJohann Gottfried Herder (1744-1803)の『民謡集 Volkslieder』(1778-79)¹⁰およびヨハン・アブラハム・ペーター・シュルツJohann Abraham Peter Schulz (1747-1800)の《民謡調歌曲集 Lieder im Volkston》第I巻(1782)の紹介記事を書いている¹¹。

ライヒャルトにとって「民謡」は

「真の芸術家が道を誤ったと感じ始めた時に、船乗りにとっての北極星のように、それを仰ぎ、そこから最も多くの利益を得るために見守るもの

Sie sind wahrlich das, worauf der wahre Künstler, der die Irrwege seiner Kunst zu ahnden anfängt, wie der Seemann auf den Polarstern, achtet, und woher er am meisten für seinen Gewinn beobachtet. (AjK, S.4)」

であり、「歌いやすい歌曲」のお手本であったと考えて良いだろう。

シュルツは《民謡調歌曲集》第I巻題2版(1785)の序文において、

「技巧的であるよりもむしろ、民謡的にすることによって、訓練されていない歌の愛好家にも、声さえ無くしていなければ、簡単に人について歌い、覚えることができるようにするという、私の努力は全ての曲に詰まっている。私は、我々の最高の詩人から、この民謡集のために作られたのではないかと思えるような歌詞を取り、旋律についてはできるかぎり単純で分かりやすいように努めた。つまり、全ての旋律が既知の外観[原文マ

*9 「民謡 Volkslied」という言葉はヘルダーが作った言葉とされている。ライヒャルトの用語法では「民衆 Volk」に2格(所有格)を表す「s」を付けず、「Volkslied」となっているが、両者の表すものは同一だと考えて良いだろう。

*10 ヘルダーの民謡概念については、吉田寛『民謡の発見と〈ドイツ〉の変貌』に詳しい。

*11 ライヒャルトは『音楽芸術誌』の「クロップシュトックのオーデへの作曲について Ueber Klopstocks komponierte Oden」の中で、「私が知っている音楽家の中でも、とりわけシュルツ氏にはこの領域で仕事をして貰いたい。彼は他の何千もの先に立つ真の芸術家だからである。Von allen mir bekannten Künstlern wünscht' ich vorzüglich Herrn Schulz in diesem Fache arbeiten zu sehen: er ist mir vor tausend andern ein wahrer ächter Künstler. (Klop, S.63)」と述べ、シュルツを高く評価している。

マ]を備えているようにした。私の経験から、素早く知られるためにはこのような見かけが民謡に有益であり、必要だからである。この既知の外観にこそ、民謡調の秘密がある。

In allen diesen Liedern ist und bleibt mein Bestreben, mehr volksmässig als kunstmässig zu singen. nemlich so, daß auch ungeübte Liebhaber des Gesanges, so bald es ihnen nicht ganz und gar an Stimme fehlt, solche leicht nachsingen und auswendig behalten können. Zu dem Ende habe ich nur solche Texte aus unsern besten Liederdichtern gewählt, die mir zu diesem Volksgesange gemacht zu seyn schienen, und mich in den Melodien selbst der höchsten Simplicität und Faßlichkeit befiessen, ja auf alle Weise den Schein des Bekannten darinzubringen gesucht, weil ich aus Erfahrung weiß, wie sehr dieser Schein dem Volksliede zu seiner schnellen Empfehlung dienlich, ja notwendig ist. In diesem Schein des Bekannten liegt das ganz Geheimniß des Volkstons; (Schulz 1785: 1)」

と述べ、啓蒙主義的歌曲がどの様に作られるべきかを示している。この序文が掲載された第2版はライヒャルトが批評を著した後に出版されているため、ライヒャルトは「既知の外観」という言葉で表された「なんとなく知っているような気がする親しみやすさ」という考えは知らないはずであるが、基本的な考え方は共有していたと考えて良いだろう。

2-6. 歌い方の注意／曲集の用い方

様々な序文の中には、各曲集をどの様に扱うべきか、そこから何を学ぶべきか、より具体的な記述も見られる。

まず、基本的な歌い方、声の出し方について《子守歌》序文において次のように述べる。

「これらのリート全ては、それらがあるべきように中庸の、あるいはゆっくりしたテンポで、柔らかな大きすぎない声で歌われるべきだということがやがて感じられるだろう。

Sie wird bald fühlen, daß alle diese Lieder, um ganz das zu sein, was sie sein sollen, in mässiger, auch wohl langsamer Bewegung und mit sanfter halber Stimme gesungen sein wollen. (WL, S.Ⅲ)」

《集いの楽しみための歌曲集 Lieder geselliger Freude》第Ⅰ巻および第Ⅱ巻序文において曲集を利用する場としては、

「だから、そのようなリートだけが収められ、様々な善良で愉快的集いによってこぞって歌い始められることを期待されているこの曲集の編集者と出版社はおそらく、この国の人々から幾ばくかの感謝を捧げられるにふさわしい。

Und so verdienen sich Herausgeber und Verleger dieser Sammlung, in der nur solche Lieder aufgenommen worden welche von jeder guten fröhlichen Gesellschaft gerne gemeinschaftlich angestimmt werden möchten, vielleicht eini-

gen Dank von ihren Landsleuten. (LF I, S. IV)」
「この曲集によって集いの楽しい歌を新たに活気づけ、一般に広まる助けとなることを望む。多くの家庭において音楽の夕べが開かれている

Man hofft auch hiedurch den frohen geselligen Gesang neu beleben und allgemeiner verbreiten zu helfen. In manchem Familienkreise giebt es Musikabende genug. (LF II, S. V)」

と記し、仲間内の集いと家庭を挙げている。

後者はさらに続き、

「少なくとも、ここで挙げた楽器の内の幾つかを用いて、リートを支え活気づけることが充分にできる。楽しい祭りのためにも器楽は、食事の間に音楽で集いを賑やかにし、時によっては行進や踊り以外にも演奏されることが知られている。それ故、カントがあらゆる人間的な衝動について包括的に論じた『判断力批判』において、上品な皮肉でもって日常的な食卓音楽についてとても適切に述べているように、器楽はしばしば隣人と聴き取れないようにしゃべることにも役立つ。

um wenigstens mit einigen jener genannten Instrumente den Liedergesang unterstützen und beleben zu können. Zu fröhlichen Festen werden auch jetzt schon oft Instrumentalmusik hinzu gerufen, die bei Tische die Gesellschaft durch Musik belustigen sollen, und die selten etwas anders als Märsche und Tänze zu spielen wissen; daher auch wohl oftmals wirklich nur dazu dienen mögen, daß man mit seinem Nachbar unbehörcht sprechen könne, wie Kant in seiner alles menschliche Treiben umfassenden Kritik der Urtheilskraft, mit seiner feinen Ironie, sehr treffend von der gewöhnlichen Tafelmusik sagt. (LF II, S. V f.)」

と述べて、器楽伴奏の可能性も示唆している。

器楽伴奏版を作る計画は第I巻序文において、

「この曲集の売れ行きが良ければ、それが編者と出版者の望むところであるが、我々は各曲にふさわしい器楽伴奏をこの先に追加として提供する予定である。

Findet diese Sammlung die gute Aufnahme, auf die Herausgeber und Verleger hoffen, so fügen wir ihr auch wohl künftig die jedem Liede angemessene Instrumentalbegleitung bei. (LF I, S. XII)」

と記して出版を予告し、第II巻序文においても

「活発な関心があったので、この曲集の第1分冊はすぐに再版され、編者と出版者はこの第2分冊についてもすぐに、100曲のリートの目的に合った器楽版の刊行に取りかかる。… [中略] …器楽版を用いるための簡単な説明は別に発行する。

Das lebhaftes Interesse, mit welchem die erste Abtheilung dieser Lieder gleich

bei ihrer Erscheinung aufgenommen wurde, hat den Herausgeber und Verleger bewogen mit dieser zweiten Abtheilung zugleich eine zweckmäßige Instrumentalmusik zu den Ein hundert Liedern zu veranstalten. … Eine kurze Anleitung zum Gebrauche der Instrumentalmusik ist dieser auch noch besonders beigelegt. (LF II, S. IV f.)」

と書かれているので、評判が良かったためにすぐさま器楽伴奏版が計画されたことが分かる。しかし、この頃からライヒャルトの生活は混乱期に入ったため(村田2016: 8f.)、実際に発行されたのは1810年ころと考えられ、曲集の利用案内も、器楽伴奏版の序文として刊行された模様である。

器楽伴奏版の序文には

「音楽愛好家はこの器楽版からも楽器を習得し、練習するにあたって利用可能である。むしろ、初心者にとってよい歌の簡単な練習曲が書けていることが常なので、この曲集を利用することは尚更好ましい。

Von diese Instrumentalmusik können Musikfreunde auch noch bei Erlernung und Uebung der genannten Instrumente Gebrauch machen und werden dieses wol um so lieber thun, da es so ganz an leichten Uebungsstücken von gutem Gesange für Anfänger zu fehlen pflegt. (LFBe, S.6)」

と書かれている。

もっとも、この時代のリート伴奏には鍵盤楽器を用いることがほとんどである。興味深いのは、《子守歌》の序文に

「これらの歌全ては、ピアノと歌の手ほどきにも最適である。子どもに手ほどきをするのなら常に、その旋律が詩行の性格と構造にぴったり合い、純粋な和声的伴奏によるよい旋律が適している簡単で分かりやすい歌以上にふさわしいものはないように思われる。Alle diese Lieder aber können auch sehr wohl beim ersten Clavier- und Singunterricht benutzt werden, zu dem mir für Kinder überall nichts zweckmäßiger scheint, als leichte faßliche Lieder, deren Weisen dem Charakter und Bau der Verse ganz angemessen sind, und für sich eine gute Melodie mit reiner harmonischer Begleitung haben. (WL, S. V f.)」

と記され、ピアノ伴奏がピアノ演奏の習得に繋がるように配慮していることである。この工夫は《若者のための歌曲集》にも見られる。

「私はできる限り簡単に留めた音楽が、同時にピアノのための心地よい入門曲、練習曲ともなるように心がけた。それ故、指遣いの番号も示している。

Die Compositionen, die hier mit den möglichst leichten anhehen, hab'ich zugleich zu angenehme Anfangs- und Uebungsstücke fürs Klavier einzurichten gesucht, und deshalb auch die Fingersetzung bezeichnet. (LJ I, S. II)」

と記され、この曲集にはピアノの指遣いを示す数字も振られている。

また、《オーデとリート》第Ⅰ巻序文には曲集とどのように接すればその曲集をお気に入りになれるかというヒントも記されている。彼は次のように言う。

「新しい曲集が手に入ったら、歌詞を見てその時の気分合っている幾つかの曲を選んでみると良い。そうすると心の内に歌が浮かび、それが皆さんにとって喜びとなるだろう。別の時には他の曲が、先ほどの気分に合わせてくれる。それらの曲が皆さんを容易に楽しませてくれるので、最後には曲集全体を気に入ることだろう。

Wählt Euch, wenn Ihr die Liedersammlung in die Hand nehmt¹, nach den Worten, nur gerade die Lieder aus, die eben zu der Zeit auf Euren Gemüthszustand passen, da werdet Ihr Euch so ganz hineinsingen, daß es eine Freude für Euch und mich seyn wird. Zu einer andern Zeit werden wieder andere Lieder Euch das seyn, was Euch jene vorher waren, und so könnt ihr mir und Euch sehr leicht das Vergnügen verschaffen, daß Euch zuletzt die ganze Sammlung gefällt. (OL I, S. II)

興味深いのは、この後で論じる、詩の読みと音楽の関係に関する助言であろう。

「歌い手は歌う前に全詩節をよく考えながら読んでおくことが必要である。… [中略] …あまり上手ではない歌手であっても、韻文を通して読んでから、音楽的アクセントに従って読み方を正すことができるように、適切な歌いかたをすることによって、適切な読み方を学ぶことができる。

ist es nöthig, daß er das ganze Lied, ehers singt, mit Ueberlegung gelesen habe. … daß der Sänger, der nicht im Stande ist, völlig gut zu lesen, durch die Akzente solcher Musik nachher seine Deklamation berichtigen könnte, und so durchs richtige bedeutende Singen richtig und bedeutend lesen lernen könnte (OL II, S. II)」

この記述は、後にも示すように、ライヒャルトが詩の読みをリート創作の基礎と考えていることと繋がる思想であろう。

第3章 作曲姿勢

3-1. 作曲姿勢の示された序文

ライヒャルトが残した序文の中で、彼の作曲姿勢にまで踏み込んだものは少なく、1つの例外、「修行時代」に出版された《美しき女性のための歌曲集 Gesänge fürs schöne Geschlecht》(1775)を除くと、「宮廷楽長時代」に限られている。1780年代に出版されたこれらの3曲集は、芸術リート作曲家としてのライヒャルト作品の主軸をなすものといえる。《オーデとリート》第Ⅱ巻は彼のリート作者としてのデビュー3作(《オーデとリート》第Ⅰ巻から第Ⅲ巻、

1779-81)^{*12}に含まれ、《オーデとリート》(1782)もそれに続くものである^{*13}。《ドイツ歌曲集 Deutsche Gesänge》(1788)の序文は、

「ここに永続的な価値を与えようと望む一つの曲集を始める。真実のみが、真実が恥じ入ってはならない真に美しい衣装だけが残る。衣装は真実に従うべき契機を控えめに高め、それ自身の最も美しい光の中に据えるのであり、真実はいかなる時でも人を愛らしく、価値あるものに保つ。

Ich fang hiemit eine Sammlung an, der ich bleibenden Wehrt zu gebgen wünsche. Nur Wahrheit bleibt, und nur ächt schönes Gewand, dessen sich die Wahrheit selbst nicht schämen darf, das den Moment, der eben an ihr beherzigt werden soll, bescheiden hebt und in sein eignes schönstes Licht stellt, erhält sie zu allen Zeiten den Menschen lieb und werth. (DG, S. I)」

という言葉で始まり、ライヒャルトがことさら自信を持って送り出した歌曲集であることがわかる。

つまり、ライヒャルトがリートのあり方について工夫をしていた時代に出版されたこの3歌曲集の序文において作曲姿勢への言及が見られることは、それなりの意味を持つと考えることができるだろう。

これに対して「啓蒙的歌曲集」に分類できる《美しき女性のための歌曲集》の序文にも、作曲姿勢が言及されているということはどういうことなのだろうか。この点も本稿の課題となる。

3-2. 朗唱

「朗誦 deklamieren / Deklamation」という言葉は、1770年頃に音楽用語として定着したものであり、「韻律に忠実 silbenmäßig」、「意味を表現 sinngemäß」、「諧音 wohlklingend」という3つの要素を持って成立する音楽的な語りとすることができる(村田1985:165)。

この言葉は、ライヒャルトの序文、あるいはその他の著作にもしばしば現れている。以下、その用例を幾つかを示そう。

「リートはただ歌いさえすればよいのか、それとも朗誦されるものなのか？」

Das Lied muß also nur ganz gerade weg gesungen, oder vielmehr deklamiert werden? (DO, S.34)」

*12 第I巻の序文は歌の効用や歌い方の注意が示されているが、彼自身の作曲姿勢についてはまだ余り踏み込んだ記述は見られない。興味深いことに、第Ⅲ巻にはそれまでの「序文に代えての忠告」は掲載されず、代わりに

Für die süsse zarte Liebe,	甘く優しい愛にとって
Was ist Lorbeer, was ist Kranz?	月桂冠が何になる。王冠が何になる。
Wenn er drymal ewig bliebe,	たとえ3倍長く生きたとて、
Für die süsse zarte Liebe,	甘く優しい愛にとって
Nichts ist aller Ehre Glanz.	いかなる誉れの輝きも、何の意味になる。

というトロヘウス4詩脚の5行詩を歌詞とした10小節のクラヴィア・リートが掲載されている。

*13 《オーデとリート》の最初の3巻には番号が振られているのに対して、1782年版には「第Ⅳ巻」と書かれていない。前者がベルリンの出版であり、1782年版のみグロッタウの出版という点でも相違があるため、「第Ⅳ巻」とはしなかったが、ライヒャルトが一連の歌曲集と考えていた可能性も残る。

「決して引き延ばされた歌ではなく、何時でも短い朗唱をそこに見つける。各音節にそれぞれ音符を与える。

so wird man nie gedehnten Gesang, sondern jederzeit nur kurze Deklamation bey ihm finden; jeder Sylbe giebt er seine Ton. (DO, S.62)」

「朗唱こそ唯一の音楽だと確信した

davon überzeugt habe, … daß die Deklamation ihre einzige Musik war. (Brief, S.121)」

「古代の合唱でも朗唱の力強い音を強化し

daß bey den Alten ganze Chöre diese starken Töne der Deklamation verdoppelten (Brief, S.12)」

「彼等のオーデが歌われるというよりも朗誦され、それによって詩人の韻律が歌われるよりも明確に表現されていたことについて、

daß sie ihre Oden vielmehr deklamirt als gesungen haben, und dadurch das Sylbenmaaß des Dichters deutlicher ausgedrückt, als es im Gesange geschieht: (Brief, S.123)」

「音楽的アクセントに従って読み方を正すことができるように、適切な歌いかたをすることによって、適切な読み方を学ぶことができるということを付け加える。

durch die Akzente solcher Musik nachher seine Deklamation berichtigen könnte, und so durchs richtige bedeutende Singen richtig und bedeutend lesen lernen könnte. (OL II, S. II)」

「全節において全オーデが一つの旋律によって語られる。

In einer Melodie für alle Strophen die ganze Ode wahr zu deklamiren. (Klop, S.62)」

そして「クロップシュトックのオーデへの作曲について」に、ライヒャルト自身の「朗唱概念」の定義が見られる。そこでは朗唱の要素として「特に重要な韻律 großbedeutende Silbenmaaße」、「思い切った理念とイメージ kühnere Ideen und Bilder」、「韻文体に組み合わされ、大胆に流れ出した言葉 gebundene verschlungene kühnhinströhmende Sprache (Klop, S.62)」の3つを挙げ、彼が作曲したフリードリヒ・ゴットリープ・クロップシュトック Friedrich Gottlieb Klopstock (1724-1803) の詩による歌曲について、解説をしている。

これらに加えて、1788年の《ドイツ歌曲集》においてはジャンル名としても用いられている。例えば同曲集の掉尾を飾る《唯一なる者に An die Einzige》は、冒頭に「レチタティーヴォのように朗唱して Rezitativische declamirt」と書かれ、曲中にも「朗唱して deklamirt」、「歌って gesungen」の指示がある(次頁譜例参照)。旋律は確かにレチタティーヴォのようでもあるが、動機的な処理も見られ、レチタティーヴォとは明らかに別種であるといえる。ライヒャルトは同曲集中、どれが「朗唱」ジャンルに含まれるのか示していないが、おそらく、《唯一なる者に》

XXV. An die Einzige.

Recitativisch declamirt.

Singstimme.

Den Ein - ge - gen, Ho - che, mel - den du lie - den kannst, for - derst du gang für dich und mir

Clavier.

gesungen. *declamirt.*

Recht: auch ist — er ein — siß — dein: denn seit ich von dir bin schont mich daß

gesungen.

schnell - sten Be - bend lár - men - de Be - me - gang nur ein leich - ter Floz, durch den ich bei - ne Ge - stalt — im - mer

fort — wie in Wei - len er - bi - de, die leuch - tet mich freund - lich und

neu — wie durch das Herd - licht be - weg - li - che Einab - len, e - z - wi - ge Eter - ne

schin - mern!

Ende.

Gleich.

をその代表として良いだろう。同曲集には、他にもこのジャンルに含まれると思われる曲が、複数存在する^{*14}。

3-3. 作曲法

それでは、「朗唱」の作曲法とはいかなるものであろうか。ライヒャルトは最初期の1774年に出版した『音楽的な詩についての親密な手紙』において、次のように述べる。

「クロップシュトックの新しく表現力豊かな韻律を彼の歌の中に聴かせられるように骨を折っている作曲家を見ることはとても嬉しいことである。なぜなら、新しい試みに到り、単純で間延びした歌により良い型を与える手段だからである。

Ich freue mich immer, wenn ich jetzo Componisten sehe, die sich Mühe geben, neue, ausdrückende Silbenmaaße eines Klopstocks in ihren Gesängen hören zu lassen: denn ich halte auch dieses für ein Mittel, auf neue Spuren zu kommen, und unserm einförmigen und schleppenden Gesange dadurch eine bessere Gestalt zu geben. (Brief S.123)」

さらに、初期の代表作である《オーデとリート》第Ⅱ巻の序文で、自分の作曲法を具体的に描いている。

「私の作曲法は次のものである。私の旋律は、常に詩を自分で繰り返し読むことによって生まれてくるのであって、ことさら求めはしない。そこで私が更に行うのは、いちいち書き出さなくとも文法的、論理的、情念的、音楽的アクセントがしっかりと結びつき、旋律が適切に語り、気持ちよく歌っているとはっきりと感じ取れるまで、少しずつ変えながら何度も繰り返すということだけである。しかもそれは、一つの詩節だけについてではなく、全ての詩節についてである。

Das ist der Art, wie ich die Lieder komponire, gerade entgegen. Meine Melodien entstehen jederzeit aus wiederholtem Lesen des Gedichts von selbst, ohne daß ich darnach suche, und alles was ich weiter daran thue, ist dieses, daß ich sie so lang mit kleinen Abänderungen wiederhole, und sie nicht eh' aufschreibe, als bis ich fühle und erkenne, daß der grammatische, logische, pathetische und musikalische Akzent so gut mit verbunden sind, daß die Melodie richtig spricht und angenehm singt, und das nicht für Eine Strophe, sondern für alle. (OL II, S. I)」

そして、次の言葉も重要であろう。

「歌詞なしには旋律が、旋律なしには言葉が思い浮かばないように一致する必要がある。旋律は言葉のためにあり、それだけではあり得ない

daß man die Melodie, weiß man sie einmal, nicht ohne die Worte, die Worte

*14 詳しくは村田1985: 159-161 を参照願いたい。

nicht ohne die Melodie mehr denken kann; daß die Melodie für die Worte alles, nichts für sich allein seyn will. (AjK, S.3)」

「分かりやすさと重要性は拍子とリズムによって旋律を獲得する。」

Die ganze Faßlichkeit und und Bedeutung bekommt eine Melodie erst durch Zeitmaß und Rythmus. (Klop, S.22)」

「詩と音楽が一致しない場合は、音楽が譲歩し、詩が優先される。

Beim Streit müssen diese aber weichen, jene gewinnen. (DG, S. I)」

つまり、徹底して歌詞を読むことに始まり、言葉の読みに忠実な旋律を作ること、もちろんそれは歌詞の意味を的確に表現していなければならず、しかも音楽的に美しいことが必要である。ライヒャルトはまさにこのような旋律作りを目指していたのである。関連する記述が複数の序文や著作にも見いだせることを考えると、この考え方が彼の基礎であったことが分かる。

そして彼にとって、それは想像力をかき立てるものでなければならず、過度の描写はむしろ想像力を阻害するという考え方が、《美しき情勢のための歌曲集》の「美しい方々へ」と題された序文から分かる。

「私は絵画のように作曲するのではなく、想像力を働かせて、そこから発する子どもの生き生きとした様子と喜びを描く。

Nicht die Gemähle componirte ich daran sondern die geschäftige Einbildungskraft und die daraus entstehende Lebhaftigkeit und Fröhlichkeit des Kindes. (GsG, S.V)」

この考え方は、啓蒙的か芸術的かというリートの性格に関わらず、ライヒャルトの基本的な態度と言える。だからこそ、過度な描写を嫌うヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ Johann Wolfgang von Goethe (1749-1832) の信頼を得ることもできたのであろう^{*15}。これによって、この章で設定したもう一つの課題、「啓蒙的歌曲集」に分類できる《美しき女性のための歌曲集》の序文においても作曲姿勢に言及されているのはなぜかということに対する答えとすることができるだろう。

おわりに

これまで見てきたように、ライヒャルトは出版した楽譜に序文を添えることが多い。その多くはリートに関連する楽譜であり、特に、啓蒙的歌曲集に分類される楽譜において顕著である。最初期の《様々な楽譜集》に始まり、《美しき女性のための歌曲集》、《子どものための歌曲集》、《集いの楽しみの歌曲集》、《ドイツの善良な母のための子守歌集》、《若者のための歌曲集》に添えられた序文がそれに当たる。

そこには、「喜び」を伝えることこそリートの目的であるという考え方が通底している。道徳的

*15 ゲーテが過度な描写を好まなかったということについては、例えば村田1997: 20f.を参照願いたい。

内容を伝えるためには、言葉にふさわしい旋律を持った詩が最適であり、そのためには、できる限り簡単で分かりやすい音楽が必要であるということが説明されている。ライヒャルトもその手本を民謡に求めようとしていた。場合によると、女性や子ども、若者達に直接呼びかけるような文体で、できるだけ簡便に書こうとしていることが分かる。つまりライヒャルトは、曲集の内容だけではなく、序文によっても啓蒙活動を行っていたということになる。

一方、1780年代に出された「芸術リート」に連なる歌曲集にも序文が付けられている。そこでは、詩と音楽がどのような関係にあるべきかが論じられ、詩の読みを重視することこそ歌曲の基礎であるというライヒャルトの主張が展開されている。「詩を読む」ということは、啓蒙主義的歌曲集の序文においてもしばしば言及されており、リートの目的を越えて、ライヒャルトが持つリート思想の基盤であると考えられることができるだろう。

このように見ると、「啓蒙的リート」と「芸術リート」は異なるジャンルではなく、ライヒャルトのリート思想の中では、その根を共有していると見なすことができるのではないだろうか。それならば尚更、18世紀的な啓蒙主義音楽家としてのライヒャルトだけに焦点を当てるのではなく、「詩の読み」の重視が「芸術リート」の成立にどのような様に関わったのかということにも光をあて、ライヒャルトが19世紀のリートをどうやって準備したのかということを論じるべきではなかろうか。

ライヒャルトの著作は大変に多く、彼が雑誌に寄稿した『自伝 Autobiographie』や複数の旅行記、彼の編集になる雑誌など、様々な箇所でもリートについて触れている。その量が余りに多くなるため、今回は『音楽芸術誌』と『ドイツのコミック・オペラについて』に絞り、整理したわけである。また、ライヒャルト以外の考え方については、シュルツだけを紹介した。今後、調査範囲を更に広げることによって、1800年前後のリート思想を追求することをこれからの課題としたい。

本稿の作成に当たって、序文中のラテン語について東京音楽大学ラテン語担当の鈴木信五教授にご教示頂いた。御礼申し上げます。

(本学教授 = 音楽学担当)

参考文献

楽譜

(多くは筆者がコピー、あるいはマイクロフィルムによって集めたものだが、IMSLPに掲載されているものについてはその整理番号を示した。最終確認日はいずれも2020年9月13日である)

- Reichardt, Johann Friedrich 1773: *Vermischte Musicalien*, Riga: J.F.Hartknoch
(IMSLP346487-PMLP559468) .
- 1775: *Gesänge fürs schöne Geschlecht*, Berlin: F.W.Birnstiel.
 - 1776: *6 Keyboard Sonatas*, Berlin: Georg Jakob Decker.
(IMSLP520599-PMLP843211) .
 - 1779: *Oden und Lieder I* , Berlin: J.Pauli (IMSLP350319-PMLP565920) .
 - 1780: *Oden und Lieder II* , Berlin: J.Pauli (IMSLP350320-PMLP565920) .
 - 1781a: *Oden und Lieder III* , Berlin: J.Pauli.
 - 1781b: *Lieder für Kinder I* , Hamburg: Herold (IMSLP349752-PMLP565021) .
 - 1781c: *Lieder für Kinder II* , Hamburg: Herold.
 - 1781d: *Gedichte von Rudolphi*, Berlin: A.Mylus (IMSLP591806-PMLP952835) .
 - 1782: *Oden und Lieder*, Grottkau: Evangelische Schulanstalt.
 - 1785: *Weihnachts-Cantilene*, Berlin: Johann Friedrich Reichardt.
(IMSLP620813-PMLP912147) .
 - 1787/888: *Cantus lugubris in obitum Friderici Magni* ,
Berlin: Johann Friedrich Reichardt. (IMSLP510483-PMLP827216) .
 - 1788: *Deutsche Gesänge*, Leipzig: G.J.Götschen (IMSLP602147-PMLP968627) .
 - 1790: *Cäcilia I* , Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung.
(IMSLP350199-PMLP329770) .
 - 1791: *Cäcilia II* , Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung.
(IMSLP350205-PMLP329770) .
 - 1792: *Cäcilia III* , Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung.
(IMSLP350212-PMLP329770) .
 - 1793: *Erwin und Elmire*, Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung.
(IMSLP350333-PMLP565954) .
 - 1795: *Cäcilia IV* , Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung.
(IMSLP350198-PMLP329770) .
 - 1796: *Lieder geselliger Freude I* , Leipzig: Gerhard Fleischer.
(IMSLP562223-PMLP565045) .
 - 1797a: *Gesänge der Klage und des Trostes*, Berlin: J.F.Unger.
(IMSLP350327-PMLP565946) .

- 1797b: *Lieder geselliger Freude* II , Leipzig: Gerhard Fleischer.
(IMSLP562224-PMLP565045) .
- 1798: *Wiegenlieder für gute deutsche Mütter*, Leipzig: G.Fleischer d.J.
(IMSLP621108-PMLP997771) .
- 1799: *Lieder für die Jugend* I , Leipzig: G.Fleischer d.J.
- 1805-06: *Le Troubadur*, Berlin: Heinrich Fröhlich (IMSLP290692-PMLP471928) .
- 1809: *Goethes Lieder, Oden, Balladen und Romanzen* I , Leipzig: Breitkopf & Härtel
(IMSLP620891-PMLP126396) .
- 1810?: *Lieder geselliger Freude* (instr. Bearbeitung) , Leipzig: Gerhard Fleischer.
(IMSLP349760-PMLP565045) .

一次文献

Musikalisches Kunstmagazin はIMSLPにて
閲覧可能である (IMSLP319659-PMLP464593)

Reichardt, Johann Friedrich 1774: *Über die Deutsche comische Oper nebst einem Anhang
eines freundschaftlichen Briefes über die musikalische Poesie*

Hamburg: Carl Ernst Bohn.

[Rep.1974, München: Musikverlag Emil Katzsbichler]

- 1777: *An die Jugend in Ephemeriden der Menschheit oder
Bibliothek der Sittenlehre, der Politik und der Gesetzgebung*
hrsg. v. Becker, Gottlieb Wilhelm 9.Stück, S.143-151.
- 1782a: *An junge Künstler in Musikalisches Kunstmagazin* I ,1, S.1-7.
- 1782b: *Ueber Klopstocks komponirte Oden in Musikalisches Kunstmagazin*
I ,1, S.22-23.; I ,2, S.62-63.
- 1782c: *Stimmphysiognomik in Musikalisches Kunstmagazin* I ,2, S.94.; I ,3, S.152.
- 1782d: *Volklieder in Musikalisches Kunstmagazin* I ,2, S.99-100.; I ,3, S.154-155.
- 1782e: *Ueber die Anwendung der Musik bey der frühen Erziehung / An die Jugend
in Musikalisches Kunstmagazin* I ,4, S.175-176.
- 1782f: *Lieder im Volkston in Musikalisches Kunstmagazin* I ,4, S.205.
- 1782g: *Wichtige Stellen aus Herder in Musikalisches Kunstmagazin* I ,4, S.206-207.

Schulz, Johann Abraham Peter 1785: *Vorbericht in Lieder im Volkston* I ²

Berlin: George Jacob Decker, Königlicher Hofbuchdrucker.

二次文献

Dürr, Walther 1994: *Sprach und Musik*, Kassel u.a.: Bärenreiter.

- [2009 村田千尋訳『声楽曲の作曲原理』東京：音楽之友社]
- Friedlaender, Max 1902: *Das deutsche Lied im 18. Jahrhundert*, Stuttgart: J.G.Cotta'sche Buchhandlung.
- 増田 大輔 2020『G.P.テレマンの音楽思想 -曲集への序文を通して-』東京音楽大学大学院音楽教育専攻音楽学研究領域修士論文(2020 年1月10日提出)
- 村田 千尋 1982「音楽的朗誦の概念の成立」『音楽学』28,2, 156-172.
- 1983「伴奏の成立 -J.F.ライヒャルトのリートにおけるクラヴィーア声部の変遷-」『音楽学』29,2, 171-185.
- 1984「有節と通作 -芸術リート of 成立 その3-」『音楽学』30,2, 145-160.
- 1985「芸術リート of 成立 -その4-」『音楽学』31,1, 52-65.
- 1997『シューベルトのリート -創作と受容の諸相-』東京：音楽之友社
- 2016「J.F.ライヒャルトのリート研究：その1 -出版楽譜の概要-」『東京音楽大学研究紀要』第40 集1-27.
- 2018「朗唱リート of 誕生」『東京音楽大学創立111 周年記念教育研究論文集』第6号 175-182.
- 2019「変奏有節歌曲 of 魅力」『東京音楽大学研究紀要』第43集1-23.
- Schwab, Heinrich W. 1965: *Sangbarkeit, Popularität und Kunstlied*, Regensburg: Gustav Bosse.
- 2004: *Das 18. Jahrhundert in "Handbuch der musikalischen Gattungen* Band 8,1: *Musikalische Lyrik*", Laaber: Laaber Verlag, 349-434.
- 関口 博子 2013『近代ドイツ語圏 of 学校教育と社会における音楽活動』平成20～24 年度科学研究費補助金(基盤研究C) 成果報告書
- 滝藤 早苗 2017『ライヒャルト』東京：慶應義塾大学出版会
- Wiora, Walter 1971: *Das deutsche Lied - Zur Geschichte und Ästhetik einer musikalischen Gattung*, Wolfenbüttel/Zürich: Mösseler Verlag.
- [1973 石井不二雄訳『ドイツ・リート of 歴史と美学』東京：音楽之友社]
- 吉田寛 2013『民謡 of 発見と〈ドイツ〉 of 変貌』東京：青弓社

ライヒャルト：出版楽譜序文一覧

略号	曲集名	出版年	出版社	序文題名	序文内容	RISM
VM	Vermischte Musicalien	1773	Riga: J.F.Hartknoch	Vorbericht	自己紹介 掲載曲の説明 今後の出版の見本として出版 歌の効用	R871
GsG	Gesänge fürs schöne Geschlecht	1775	Berlin: F.W.Birnstiel	An die Schönen	(Nachricht = 出版者からのバート譜案内) 歌の効用 作曲姿勢	R845
Son	6 Keyboard Sonatas	1776	Berlin: Georg Jakob Decker		皇太子への献辞(イタリア語)	R879
OL I	Oden und Lieder I	1779	Berlin: J.Pauli	Eine guter Rath statt der Vorrede	詩人への献辞 歌の効用 歌曲集の使い方	R872
OL II	Oden und Lieder II	1780	Berlin: J.Pauli	Eine guter Rath statt der Vorrede	創作姿勢 歌い方の注意	R873
OLIII	Oden und Lieder III	1781	Berlin: J.Pauli	Für die süße zarte Liebe	リート楽譜	R863
LK I	Lieder für Kinder I	1781	Hamburg: Herold	Nachricht	(出版者からのお知らせ=予約者名簿の欠落)	R863
LK II	Lieder für Kinder II	1781	Hamburg: Herold	An die Jugend	歌の効用 教則本の紹介 歌曲集の使い方	R882
GR	Gedichte von Rudolphi	1781	Berlin: A.Mylus		読者への献辞	R875
OL82	Oden und Lieder	1782	Grottkau: Evangelische Schulanstalt	Vorbericht	創作姿勢 歌い方の注意	R828
WC	Weihnachts-Cantilene	1785	Berlin: Johann Friedrich Reichardt		作詞者クラウディウスへの賛美(髭文字)	R820
FM	Cantus lugubris in obitum Friderici Magni	1787/88	Berlin: Johann Friedrich Reichardt		追悼文(ラテン語)	R843
DG	Deutsche Gesänge	1788	Leipzig: G.J.Göschel	Vorbericht	創作姿勢	R830
C I	Cäcilia I	1790	Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung	Vorbericht	宗教音楽の価値 曲目案内 付録版画	R831
C II	Cäcilia II	1791	Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung	Vorbericht	出版挨拶	R832
C III	Cäcilia III	1792	Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung	Vorbericht	フリードリヒ大王追悼カンタータの詳しい紹介	
EE	Erwin und Elmire	1793	Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung	An Göthe	ゲーテへの献辞	R833
CIV	Cäcilia IV	1795	Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung	Vorbericht	内容紹介 付録版面断念	
LF I	Lieder geselliger Freude I	1796	Leipzig: Gerhard Fleischer	Vorbericht des Herausgeber	歌の効用 歌曲集の使い方 器楽伴奏版	R846
GKT	Gesänge der Klage und des Trostes	1797	Berlin: J.F.Unger	Der Genius	王妃への献辞=詩	
LF II	Lieder geselliger Freude II	1797	Leipzig: Gerhard Fleischer	Vorrede	歌の効用 歌曲集の使い方 器楽伴奏版	R880
WL	Wegelieder für gute deutsche Mütter	1798	Leipzig: G.Fleischer d.J.	Vorrede	歌の効用 歌曲集の使い方 ピアノ伴奏	R862
LJ I	Lieder für die Jugend I	1799	Leipzig: G.Fleischer d.J.	Vorrede	歌の効用 歌曲集の使い方 ピアノ伴奏	
Tr	Le Troubadur	1805-06	Berlin: Heinrich Fröhlich		(出版社後書き)	R856
GL I	Goethes Lieder, Oden, Balladen und Romanzen I	1809	Leipzig: Breitkopf & Härtel		皇后への献辞	
LFBe	Lieder geselliger Freude (instr. Bearbeitung)	1810?	Leipzig: Gerhard Fleischer	Vorrede	歌の効用 歌曲集の使い方 器楽伴奏版	